

---

# とある当麻の性転換

蒼井水晶

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある当麻の性転換

### 【Nコード】

N4645X

### 【作者名】

蒼井水晶

### 【あらすじ】

第三次世界大戦も終わり、平和に過ごしていた上条当麻に新たな不幸が襲いかかる！

目が覚めたら、女の子になっていた！？

学園都市中にそれが通達された！？何故、Why？

フラグ立てた女の子は逆に男に！クラスの男&一方通行&他の誰かにフラグ乱立！

女の上条属性は危険すぎる！

貞操の危機！？

助けて土御門！

## Let、s性転換！（前書き）

突発的に書きました。

不定期更新になります。

お楽しみください。

## Let、s性転換！

私<sup>わたくし</sup>、上条当麻は、今、人生最大の不幸に見舞われております。  
あるべき上条さんの下条さんがないと言う。

そう、今俺は、女になっていたのだ！

インデックスはイギリスに行っており、この部屋には居ない。食費  
が大幅に減るのは良いんだが……。  
これはねえだろ……。

「不幸だー！！」

第三次世界大戦が終わって、しばらくたったからもう何もないと思  
っていたのに……。

本当に不幸だー！！

ガラッ！！

「上やん！大丈夫か……にや？」

「土御門……。つちみかどー！！」

《SIDE：土御門》

ねーちゃんからの電話で、古代文明の魔術が発動。『神上』の可能性  
がある人間を死に至らしめるはずの効果だった。

上やんの所に急行した俺は、望みたくない上やんの死体を見るのだ  
ろうかと思いつつドアを開けたのだったが。

そこに居たのはなんとかわいらしいショートカットが似合う少女  
だった。

「にゃーーvふおいのびfほいvるふいほh?おhbっf!!」

言語化出来ない。あの上やんが。なんとも守りたくような身長(1  
55?)何げにある胸(80ぐらいだろう)が、  
俺に抱きついたのでから。

「ひくっ、えぐっ、つちみかどお、私、これからどうなるの、ひぐ  
っ」

上やんは、泣いていた。どんな時にも泣かなかったあの上やんが。まだ、原因が分からなく、どんな魔術かも特定出来ていない。俺にはただ、抱きしめ返すことしかできなかった。一人称が『私』になつてるにやー。それは良いとしても、理性が崩壊するにやー！涙目＋上目遣いは危険ニヤー！

《SIDE：上条》

思わず、押し寄せた不安に泣いてしまった。

上条さんは情けないことですよ。

「上やん、原因不明の魔術が、上やんをおそつたにやー。上やんの幻想殺しても打ち消しけれなかつたんだぜい。アレイスターが学園都市中にこれをなぜか知らないが通達したにやー」

「上条さんには話の筋が分からないんでせうが？」

なんだその魔術は。

「なんだにや？ねーちん。なんだって!？」

土御門は神裂と電話しているようだった。

途中で大声を上げて、びくつとした俺はまた、少し泣いてしまった。

「わかつたにやー」

土御門は電話を切り、こつちを向いた。

「上やん、泣いちゃだめだにやー」

と言われて顔を上げると、ぺろつと、目の下をなめられた。

「????????」

俺は顔を真っ赤にしてしまう。

「何をするんだ土御門!」

「泣くとせつかくのかわいい顔が台無しだにやー」

でも、土御門って、サングラス外すとかっこいいんだよな、背も高いし、筋肉もいい具合についてるし、私は好き……。

bmlbjnkvnhjのjつbmjhhvjよbつhm!!--!

私は何を考えているんだー!



## Let、s性轉換！（後書き）

突発的に考えたモノです。

反省しております。

「とある少年の転生人生」<sup>アンノウンライフ</sup>が主連載です。「とある少年の転生人生」<sup>アンノウンライフ</sup>はシリアスが多いので、息抜きにでもどうぞ。

## いきなりピンチ！？（前書き）

「とある少年の転生人生」アンノウンライフの主人公も出ます。  
しかし、本編とはだいぶ口調が違います。

いきなりピンチ!?

なんだかんだあったけど、学校に登校することになった私と土御門。

いつもの公園を横切っている辺りでまた不幸がやって来た。

こけたのだ、私は。しかも土御門の目の前で。

「が、眼福にやー」

と言って盛大に鼻血を噴き出して倒れてしまった。

確か、履いたのはピンクの下着だったと記憶している。後で土御門は殴るとして。

その時パニックに陥った私は裏路地をめちやくちやに駆け抜けた。

そこでまた不幸に出会うわけで。

不良に私はぶつかってしまった。

「おいおい、何すんだ、テメエ」

男の時にはそこまで怖くなかった不良が、性別が変わるだけでこんなにも怖くなるなんて。

「あ？結構かわいいじゃねえか。相手してくれよ」

と私の手を掴み、たまり場であろう古い、廃棄されたマンションに連れて行った。

男の時には振りほどけたその手が、今は振りほどけない。いきなり好きでもない相手とヤツて処女喪失か、と絶望したその時。

「おい！何してるんだあんたら！」

救世主が現れた。

少し、大げさかもしれないが、その時の私にはそう見えた。

雷撃の槍を放ち、牽制した少年。常盤台っぽいブレザーとズボン。そして電撃。

「御坂……か？」

「そつだよ。上条さん。今助けてあげる」

全然口調ちがうじゃん。かっこいいよ。

「テムエ、超電磁砲だな！」

「うるさい！」

不良が吠えたのと同時に御坂も吠えた。

私の体はビクツと震える。

どうも、大声に弱いようだ。

「何間抜け面さらしてんだ？上条」

さらにもう一人、私の戦友とも言える少年。いや、青年かな？

「たくつ、超電磁砲が付いてこいつて言うからきてみたら、なんだよ、色恋沙汰かよおもしろくもねエ」

七城優一。学園都市第二位の能力者で、震動を操る。また、私と一緒に戦い続けてくれた大切な友人。現在、世界最強の人間の一人。

魔術を破壊する大剣や、「悪魔の力」を撃ち出す銃。謎の兵器など、知らないことはたくさんあるが、ローマ正教を壊滅させたり、神の右席のうち、二人を殺害したりなど、行動は謎に包まれても居るが、「大切な人」を守るために戦っている。

私たちの学校の制服ではなく、よく分からない、自分の身長よりでかい大剣を背負ったり、腰に弾丸ベルトを巻いたりしたパンクな服装。

ちなみに実弾。

(デビルメイクライ4のネロの服装です。腰の弾丸ベルト以外)

『黒剣船斬』

大剣を背負った状態から袈裟懸けに振り下ろし、私が連れて行かれそうになったビルを文字通り

ばっさりと真つ二つにした。

まさに世界最強。

「ひえええええっ」

私の手を握っていた不良は一目散に逃げていった。

「ツチ。小物が」

うわー、面白くなさそう。

「第三位、上条は僕が送って行く。同じ学校だしな。だから速く学

校に行きやがれ」

「でも……!!」

「さっさといけ! 斬るぞ!!」

脅しだよそれ!

「分かった」

御坂は納得行ってなさそうだったが、学校に行った。

「さて、瞬間移動するぞ。歯<sup>マツ</sup>ア食いしばれ」

えええっ!! 本<sup>マツ</sup>気がよ!

インメント・ゼロ  
『縮地』

次に目を開けたときには私たちの学校の校門だった。

いきなりピンチ！？（後書き）

どうだったでしょうか？

オリキャラの武器や能力、技は「とある少年の転生人生」アンノウンライフを読んで  
みれば分かると思います。

驚く小萌先生！（前書き）

今回は短めです。

## 驚く小萌先生！

優一と私は校門に着いてから急ぎ足で職員室へ向かった。

さりげなく私をかばうような位置に立っけてくれている。こっぴつ気遣いが出る男の子ってなんかいいよね。

（私も『元』男だけど）

私は彼に何度も助けてもらってる。本当に感謝してもしきれないくらい。

彼は自分のことを、

「当麻とは違う。僕は敵を容赦なく殺す、だから、当麻みたいな救世主にはなれないのさ。僕は、秋紗を守ればそれで良い」  
そう言った。男のときの私はもちろん反論した。

「ふざけんな！何でお前はいつも

「僕は当麻の影。言うなれば、闇の英雄だよ。終わらない宿命を背負っているんだ。

詳しくは言えないけどね」

そのときの優一の顔は。

とても寂しげで。

私は、それ以上何も言えなくなってしまった。

でも、絶対アイツの秘密をいつかは知りたい。

それが幻想だつてんなら、その幻想をぶっ殺す。

「おい、当麻。当麻！」

「な、何！？」

「職員室ついたぞ。さっさと行ってこい」

「あ、うん」

えーと、子萌先生はどこかなあ？

「上条じゃん！？本当に女になってるじゃん！けっこうかわいいじゃんよー！」

って黄泉川先生！小萌先生じゃなくてあんたかよー！！

「はあー。黄泉川せんせ、ロリ先生はどこすか？」

「ロリじゃないですよー！！！！」

「ああ、居た。小萌先生、こいつが当麻です」

と、先生の抗議を華麗にスルーし、私を指差す優一。もう少し先生敬わなくちゃだめですよ……。

「かかか、上条ちゃん！？本当に女の子になっちゃってるのですよー！！！！」

「ええ、まあ」

「さつさと教室へ行きましょう。ここで喋っているとチャイムが鳴っちゃう」

「そっだね」

驚く小萌先生！（後書き）

いかがだったでしょうか？

今回は教室でドタバタ&あの人が転校してきます。

それでは。

**教室でドタバタ！（前書き）**

上条さんが完全に女性化しています。  
お気をつけください。

## 教室でドタバタ！

優一を先頭にてくたく教室へ。

私は身長が男の時より小さくなっているから、目線がかなり低い。目の前の優一を見上げる。

『前方のヴェント』との戦いで、「悪魔の力」を完全に解放し、魔人となって圧倒的な力でヴェントの存在そのものを消してから、髪の毛は銀色となっている。本人曰く「黒には戻らない」そうだ。

彼は一方通行アクセラレータより見つけやすい。背中の大剣とその銀色の髪が目立つ、それに足首まである真っ赤なコートに黒の上下にファスナーがついたフリース、Tシャツに、赤色のズボンに赤いブーツ。

学校に行くのに学ランじゃないの!?

一方通行と戦ってからずっと彼は学生服を着て来ていない。

黒が赤を基調としたロングコートにフリースやパーカー、それにジーンズのような服装をしていた。

夏でもロングコートは外さなかった。何故!?

さすがに暑かったのだろうが、地肌にコートを直接羽織っていた。コート着るなら普通にシャツ着とけよ!!

「着いたな。さあ、当麻。行ってこい」

ここで私を教室に入れるの!?!騒ぎが酷くなるよ!

「いいから行けっ」

ぎゃー!!!

ドガンッ!!

首根っこ掴まれて教室に投げ入れられたよ!?

「誰っ!?!」

「どうも、吹寄」

「上条か!?!貴様本当に女になっているのか!?!」

「そうなのですよ……」

ちなみに今の私の状態は、顔が吹寄の母性のかたまりに埋まってる状態です。はい。

「本当に。女の子に。なってる」

姫神か。男になってないな。良かった。

「ほんまにその小さい子が上やんやと!？」

青ピ……。心配してくれるのか。

私は吹寄から離れ、青ピに向き合った。

そして青ピは膝について私にこう言った。

「上やん！結婚しよう!!」

ええええええええええ!!!!!!!!!!

「なに寝言言ってんじゃおんどれエエエ!!!!」

とエセ広島弁を言いつつ、

「がふっ!!」

青ピに飛び蹴りをかましたのは優一だった。

「つたく、油断も隙もねエ」

「ありがとう、でいいのかな？」

「それでいいんじゃないかにゃー」

土御門！よくも…。

「よくも私のパンツみてくれたなー!!」

うりゃあ!

パンツ!

あれっ?

「上やん……。男のときも俺に勝てないのに、それより力が弱い女

で俺に攻撃が届くと思ってるのかにゃ？」

そして私の耳元へ口を近づけてこう言った。

「まあ、強気な上やんを征服するのも、いいかもしれんだぜい

耳元で囁かれて、私は身体が硬直する。

「だから、起きてんのに寝言なんざ言ってるじゃねエっての」

優一が呆れたような声音で言い、土御門に強烈な前蹴り上げを打ち込んだ。

「にゃー！ー！！！」

土御門は文字通り、天井に突き刺さった。

優一強すぎじゃない！？

「何か教室が不良の大喧嘩の後と化してるのですよー！！！」

小萌先生、その言葉を最後に凍結。

優一はというと、

「あーあ、だりい」

と言いながら首に掛けていたヘッドフォンを付け直して音楽を聴き始める。

かなり大きい音量で聞いているのか、英語のヴォーカルの声が音漏れしている。しかもかなりアップテンポなロック。

ただ、私はこの教室にいるはずの一方通行アクセラレータが何も言っていないのが気になり、席の方へ目を向けると口をあんどぐり開けたまま、私に見入っていた。

あらま。

**教室でドタバタ！（後書き）**

いかがだったでしょうか？

次回は一方通行中心で話が進む予定です。  
それでは。

秘密の会話！？（前書き）

「とある少年の転生人生」のネタバレがあります。  
気をつけてください。

## 秘密の会話！？

あ、そうそう、言うのを忘れていたんだけど、姫神は優一に一目惚れしちゃったんだって。

それまでは私が好きだったみたい。

おっどろいたなあ。

それはともかく、一方通行が完全に凍結しちゃってる。なんとかして解凍してあげないといけない。

「おい、一方通行、だいじょうぶー？」

「はっ！う、うるせエ、除いてくンじゃねエ！！」

一方通行は顔が真っ赤だ。どうしたのかなあ？

「H a h a h a : H a - h a !」(和訳：ハッハッハッ：ハッハ！)

と私と一方通行がいいふんいき(なぜか変換できない)になっている後ろでは、楽しそうな笑い声(アメリカ力風挑発)を上げながら大暴れしている戦闘狂がいる。

「三下ア、お前、オレに近づくんじゃねエぞオ」

(そうでもしねエと理性が吹っ飛んじまいそうだ)

「え……どうして？私のこと……嫌い？」

やっぱり、わかりあえないのかなあ……グスツ。

(涙目+上目遣いで見つめるなアアア！！理性が崩壊するウウウ！！！！)

「い、いや、違うけどよオ、お、オレは悪党だ。ヒーローにはなれねエよ」

「今、私は『イマジンプレイカー幻想殺し』のないただの無能力者だよ？それでも一方レベルゼロ通行は私をヒーローと呼ぶの？」

「アア、三下に影響を受けたのは確かだからなア」  
「そうなんだ……。」

「なあ、一方通行」

「なんだ。土御門」

「カミやんは様々な魔術結社から命を狙われているんだぜい」

「それがなんだってんだ？」

「今カミやんには『イマジンブレイカー幻想殺し』がないにや。ただの一般人だぜい。

そんな時に護衛がいないと大変な事になるにやー」

「だから teme は何を言いたいんだよオ！！」

「つまりだにやー、カミやんをほっばらかしにしておくとか誘拐されるばかりか、慰みものにまでされる可能性があるにやー。今のカミやんはかなりかわいいからにやー」

「なん：だと！！そんなことは絶対にさせねエよ！！」

「当たり前だぜい。だから一方通行にはカミやんの護衛をたのみたいんだにやー」

ふたりそろって何を話してるんだらう。

「上条、こつちへ来い。ここは危ない」

と、私は吹寄に引つ張られていった。教室の外に。

「Hey! What's up!」(和訳；オイ！どうした)

相変わらず、優一は暴れてるし、土御門と一方通行は話し込んでいるし、ヒマだなあ。

「そんなの、マクニチユード世界滅亡に頼めばいいじゃねエか。なんでオレなんだ。アイツは便利屋なんだろう？」

「優やんは闇を殺す者なんだぜい。それ以外の仕事だったたくさんあるんだにやー。デヴィルキル悪魔殺しで、金稼いでるし、今はとびっきりの要

人ロイヤルガードの近衛騎士なんだぜい」

「だれだア？そのとびっきりの要人ってのは？」

「イギリス七大貴族の一人にして、イギリスの最重要機密。『ウエスタの巫女』のフィオナ・スコット・ハーベルだにやー」

土御門の話が聞こえた！

『ウエスタの巫女』って確か、クーデターで第二王女に真つ先に狙われた人よね……。

確かその時の任についていたのが優一だったのよね。ミカエル天使長の力を

受けて、力を増した騎士団長ナイトリーダーと互角に戦って退けたとか何とか。  
優一恐るべし……。

「で、なんで第二位がその任務についてるんだア？」

「詳しくは言えないんだぜい。学園都市で魔術師が暴れて、それを引き取りに来たのが出会いだにやー。まあ、その後便利屋営んでる優やんに最大主教アークヒシヨップ自ら、依頼したらしいんだぜい」

へー、そこまでは知らなかったなあ。

「ンで？」

「フィオナ嬢、通称フアナ様だが、『その美貌は天をも落とす』と称される絶世の美少女だにやー。他の貴族達からの求婚が山のようにあるんだぜい。なかには、強硬手段に訴えてくるヤツもいるんだにやー。自分の下卑た欲望のままに行動するやつとかにやー」

「それで？だからなんだってんだ？」

「『ウエスタの巫女』は神性が求められる。恋愛ならばいいらしいが、そんな犯罪じみたことされてはイギリスの魔術的防護はガクンと下がる事になるんだにやー」

「めんどろだなア。それで？」

「だから、優やんを破格の報酬で雇ったんだにやー。こつから先は俺の推測だが、二人は出会った当初から惹かれ合っていたんじゃないかと思っただぜい」

この話を聞いて、一方通行の目が俄然輝き始めた。

もちろん私も。

土御門の話を聞き逃さん、とするように。

「フアナ様は心を抑圧されていたんだにやー。面倒臭い貴族の礼儀とか、『ウエスタの巫女』の事とかをずーっと、叩き込まれて育つて来たんだにや。毎日監視されてるようなもんだ」

「それは、ム力つくなあ」

一方通行はそう呟いた。

「皆、『ウエスタの巫女』としての絶大な権力の付属品としか自分を見られない社会の中で育ったフアナ様が、逆に『ウエスタの巫女』

では無く、『ファイオナ・スコット・ハーベル』として見てくれる人間が現れたらどうなる？」

「それは、喜ぶし、心を開くよ……」

私は思わずそう呟いた。

「そう、だから、フアナ様は優やんに惹かれたんだぜい」

「じゃあ。優一君はなんで？」

「優一は強すぎる。強すぎる故に孤独だ。だから、同じ孤独を感じたフアナ様に惹かれたのもあるようだが、その笑顔を守りたい、そう思っていたのがいつの間にか恋愛感情に発展していったんだにやー。アイツの魔法名は *Notera 129*（我が剣は君の笑顔のために）だしにやー」

わー！、優一の魔法名なんて初めて聞いたよ。しかも『我が剣は君の笑顔のために』ってなんかかっこいい！！

「フアナ様の方も襲いかかってくる連中から命がけで守ってくれる騎士に悪い感情は抱かないんだにやー。フアナ様が手に入らないことに業を煮やした貴族どもはクーデターに乗じて、フアナ様を誘拐する計画を立てたんだにやー。そして貴族どもは動かせる全戦力を投入して、近衛騎士二人、優やんともう一人、ロイ・ミイスを殺しにかかったんだぜい」

ロイ・ミイスってあの爽やかな金髪のイケメンさんのことだよな！ やっぱり強かったんだ！

「ロイ・ミイスは一人でイギリスに残って、二人を国外に逃がしたんだにやー。その、二人の逃避行で愛が確実にめばえたんだにやー」

「つまり、優一は、フアナ様の心を盗んだってことだね」

「大当たりだぜい、カミヤん。貴族達は魔術戦艦の大艦隊までも起動させて2人を追ったんぜよ。頭に重傷を負った優やんはその重体のまま中東の紛争地域を走り抜け、様々な妨害を退けながら学園都市に辿り着いたんだぜい。だが、優やんは瀕死の状態だぜよ。魔術砲撃を浴びた優やんは、その効果により、血が止まらなかつたのだにやー。そこでフアナ様は『ウエスタの巫女』の空間移動術式で、

エリザリーナ独立国同盟へと歩を進めた。治療してもらった優やんだったが第三次世界大戦に巻き込まれるんだぜい。その中で、右方のフィアンマの攻撃によりファナ様は軽い怪我をするんだにゃー。それでブチきれた優やんは、大天使、神の力と『ベツヘレムの星』を撃墜。神の力に至っては消し飛ばされたにゃ」

「それで？そのクソ長い説明で、言いたいことはなんだ？」

「つまり、優やんは手が離せないということだにゃー。それに……」  
ここでまた土御門は一方通行の耳に顔を寄せた。話が聞こえなくなつた。

「もし、カミヤんを守りきつたら、好きになつてくれるかもしれな  
いにゃー」

「なっ!?!」

一方通行の耳が赤くなつた。

「まあ、そう簡単にフラグは立てさせないんだぜい」

「ンだと!?!」

「俺もカミヤんはかわいいと思うからにゃー」

優一と小萌先生はいつの間にかどこかへ行つていた。

それにより、吹っ飛ばされたクラスの皆が戻って来ている。

優一は何処へ行つたんだろう？

まあ、いいや。席に着こーっと。

ちなみに話してた2人も席に着いている。

秘密の会話！？（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回はオリキャラの登場です。  
それでは。

## 転校生！（前書き）

オリキャラが出ます。

「とある少年の転生人生」メインヒロインの、ファナとエリシアです。&ネタバレがあります。

## 転校生！

皆が喋りつつ待っていると小萌先生が入って来てこう言った。

「皆さん！いいお知らせがあります！」

「なんやー！」

青ピ……。そんなすぐさま立って叫ばんでもいいだろうに……。

「野郎ども喜べー！転校生は女の子2人なのですよー！！！」

うおおおおっ！！！！

教室がどよめいた。

「巨乳か！？巨乳なのか！？」

「何を言う！貧乳に決まってる！」

わーわー、ぎゃーぎゃー叫んでいる。まったく、話題が下品だなあ。

「うるっさー！ーい！ー！！！！！！！」

あ、吹寄がブチ切れた。

ゴングゴングゴングゴングゴング。

「マシンガン……ヘッドバット」

「皆さん、静かにしてください！」

と小萌先生が言ったとたん、皆はピタツと静まった。

「入って来てくださーい」

入って来たのは、どこまでも透き通るような空色の髪を、毛先の跳ねたボブカットにした絶世の美少女。

私は思わず叫んでいた。

「ま……まさか、フィオナさん！？」

そう、彼女こそ土御門の話に出て来た『ウエスタの巫女』、フィオナ・スコット・ハーベル。

私の方を向いたフィオナさんは、はにかむような笑顔を、その整った顔に浮かべた。

うおおおおっ！！！！

まるで、地震が来たような揺れ。

それが、優一の起こした地震ではなくて、クラスの男子の歓喜の叫びだと気づくのに、私は少し時間がかかった。

一人の男子がフィオナさんの前に出て来てこう言った。

「僕と永遠を誓ってください!!」

その男子は、はあー。思わず溜め息が出る。

……青ピだった。

「なーにすーんねーん」

青ピを無言で引き摺って行ったのは土御門。

それを困ったような笑みを浮かべながら見送ると、クラス全員に向けて言った。

「ごめんなさい。私には、心に決めた人がいます」  
さすが貴族のお嬢様、断り方も品がある。

まあ、私の感想はともかく、男子が吐いた溜め息に、教室は包まれた。

「残念……言い交わした人がいたか」

とかなんとか男子Aが言ってるけど。

「お嬢様!!」

そのとき教室に駆け込んで来た白銀色の髪の青年、皆さんはもうお分かりだろう。(皆さんって誰だよ。) 我らが第二位、七城優一である。

全力で走り込んで来た優一に対し、フィオナさんは悪戯っぽい笑みを浮かべてのたまった。

「もう私はお嬢様じゃないよ?」

「……フィオナ様」

「ゆ・う・い・ち?」

唇の前に人差し指を持って来て、投げキッスをするように、その人差し指で優一の唇をつつきながら言う。

その仕草一つだけで、匂い立つような、それでいて清純な色気がフ

イオナさんから立ちのぼった。

(何を言ってるんだ私は!?)

それに対して優一は呆れたように頭を掻くと、優しい微笑みを浮かべて両手を広げた。

「……おかえり、ファナ」

「ただいま!! 優一!!」

フィオナさんは見ているもの全てを虜にしそうな魅力的な笑みをこぼして、カ一杯優一に抱きついた。

「優一、優一、優一イ!!」

フィオナさんは優一に抱きつくくと、胸に顔を埋めて、ただ、優一の名前を何度も呼ぶ。

「ファナ……」

優一は対照的に、フィオナさんの名前を一度だけ呼ぶと、「もう離さない」と言わんばかりにきつく抱きしめた。

いつもは邪魔をしようとする、愚か者の男子も、このときばかりは無言であった。

だが、その2人だけの空間を明るい声が貫いた。

「もおー! 2人とも! 私が入りにくくなるじゃない!」

その透き通る声を聞いて、フィオナさんを抱きしめていた優一が顔を上げた。

「エリシア!! あんたまで来たのか!?!」

「当たり前じゃない! ファナだけじゃなく、私の心まで攫って行ったくせに!」

栗色の髪を、肩にかかるかかからないかぐらいのボブカットにした快活そうな美少女。

彼女は、エリシア・ミス。

土御門の話に出て来た、ロイ・ミスの妹だ。

フィオナさんと比べても遜色の無い美少女の登場に教室中がどよめ

……… かなかった。

エリシアの言葉に、皆度肝を抜かれていたからだ。

「あんなに2人で激しく求め合ったのに!!!」

ブーーーーーッッッ!!!!!!!!!!

「ゴホッゴホッゴホッ」

教室中の皆が吹いた。

あ、違った。優一は咳した。

「いや、2人とも酔ってたし、キスから先には行ってねエだろ……」

「ファーストキスだったんだよー!!!」

「……、俺はセカンドキスだったか?」

「何をトンチンカンな答え返しとんねん」

おおー!青ピがついにツッコミに回った!

「知ってるよ!ファナとキスしてたことぐらい!!!」

ブーーーーー!!!!!!!!!!!!!!!!!!

またも教室中が吹いた。

あ、違った。優一は真っ赤になっている。

「……分かった」

チュツ……

「んっ……ふっ……うふうっ!」

エリシアの口から時おり甘い声が漏れる。

「ぶはっ。いきなり何すんだ!」

と、怒って腰の長剣を抜いて斬り掛かるが……。

「甘エよ、ファナやお前みたいにな」

ボンッ!

爆発したような音が聞こえると、美少女2人は真っ赤になっていた。

「気障つたらしい台詞吐いてますがー、二股なのですよー」

「……そうだ、そうだ!」

男子連中が一丸となって反論する。

「あー、それは、何と云うか……」

優一はなぜか言いにくそうにした。

男子が轟々と避難の声を上げようとしたとき、エリシアは思い出したように手を叩いた。

「女王様公認なんですよ」

「……は？」

皆、目が点になる。

「だからあー、イギリスのエリザード女王ですって」

ええええええええええっ！！！！！！

驚きの声が教室中から広がる。

それはそうだ。いきなり、最高権力者の名前が出て来たのだから。

「エリザード様はこう言われた。『あの少年は、まるで自由を求め鳥のように飛び立って行ってしまっ。それを防ぐには足枷が一つでは足らぬのだ。ファナー人では到底あの自由な鳥を飼いならすこととは出来ぬ。逃げ出さないようにするには、枷が2つ必要だ。エリシア、お主がもう1つの枷になるがいい。その恋と言う感情に蓋をしたくはないであろう？』と」

「ゆーいちも言ってたよね？」

「何が？」

「『お前ら2人を守るためなら、世界だって敵に回してやる』ってさ」

「……、僕からしたら、2人がいれば……僕の生きる理由になる」

「相変わらず、凄いい台詞を言うね。ななしろ」

滝壺。浜面の彼女であり、エリザリーナ独立国同盟にいた少女。

「はっ！惚れてんだ。悪いか？『ウエスタの巫女』なんて関係ねえ。

僕は2人が居ないと生きて行けないんだよ！！」

この言葉で納得したのか、静かになった。

「『大好きっ！』」

2人揃って抱きつくなよ。桃色空間作るなよ。

「あー、ゴホンゴホンッ」

吹寄ナイス！わざとらしい咳払いだけど。

「あ、ごめんなさい」

「えーと、私は、フィオナ・ハーベル。特技は歌を歌うこと！よろしく願います！」

パチパチパチ。盛大な拍手が舞い起こる。

「私は、エリシア・ミス！特技は剣術と料理！よろしく！」

あ、私たちにちよっかい掛けたら問答無用で私たちの恋人ヒロイに切り刻まれるからっ！そこんところよろしくっ！」

一瞬の静寂の後、また拍手が沸き起こった。

「つたく、お転婆だなあ」

と笑顔で言いながら、エシリアの髪をぐしゃぐしゃやっている優一。身長差が10センチぐらいあるのかな？

「何するんだー！！」

うがー！と暴れるエリシア。それを笑いながら押さえる優一。

優一が時折見せていた影は完全に姿を消した（と思う）。

小萌先生の連絡があり、HRが終わると、すぐさま2人への質問タイムが始まった。

3サイズを聞く馬鹿者がいたけど、優一に蹴り飛ばされるか、エリシアからの男の勲章に痛烈な一撃で、のびていた（笑）

その後2人は、私の近くへ来ると、私を見ながら優一に聞いた。

「この子が『元』上条当麻？」

『元』ってなんだよ。地味に傷つくぞ。

「ああ、そうだよ」

「ふーん。意外とかわいいじゃん。男のときは遠目にしか見てないからさー」

ま、その後色々質問されたんだけど、なぜか土御門と一方通行が競って質問に答えていた。

なぜ？

（カミヤンにかっこよくみられたいんだにゃー）

（三下のポイントを上げる！！）

土御門と一方通行アクセラレータの真意を上条当麻かのじょは知らない。



転校生！（後書き）

いかがだったでしょうか？

今回は甘めに仕上げてみました。

「とある当麻の性転換」は上条当麻の恋愛（鈍すぎて、好意を向けられているのに気づかない）と、オリキャラの甘い恋愛模様を中心に展開します。

次回は放課後からの話です。  
それでは。

## オリキャラ紹介。(前書き)

今までに出て来たオリキャラを紹介します。  
ほかにもオリキャラは出る予定ですが、とりあえず主役の説明です。

## オリキャラ紹介。

ななしろゆういち  
七城優一

学園都市第二位の震動能力者。能力名、マグニチュード世界滅亡。

その名の通り、扱う力は地震の力。他にも、腕や脚に震動を纏って、高周波ブレードにしたり、同じく、衝撃を纏わせて、地震のエネルギーを直接相手に見舞ったりと、その破壊力は一方通行をも上回るとされる。

彼は魔術界の伝説『忘れ去られた剣士』の息子であり、『悪魔の力』を扱うことが出来る唯一の人間。

人間と言うよりは、半人半魔。

悪魔の力により、圧倒的な戦闘能力を有する。

(詳しくは、「とある少年の転生人生」アソウケンライフ第5話を参照してください) その力は神の右席を消し去るほどの力。

通称『ダイクスレイヤー闇を殺す者』

便利屋『デビルキル Devil With Dance《悪魔と踊ろう》』

を営んでおり、『デビルキル悪魔殺し』や、犯罪、魔術結社の壊滅、悪魔を呼び出そうとする愚か者(複数の場合もあり)を抹殺する、などの仕事をしている。

また、ロイヤルガードファイオナ・スコット・ハーベルの近衛騎士。

ファイオナ・スコット・ハーベル

元はイギリス七大貴族の筆頭に名を連ねていたハーベル家の出身。

『その美貌は天をも落とす』と称される絶世の美少女。しかし、後述の特殊能力や、貴族的な儀礼。自分自身を道具としか見ない、貴族達に絶望し、心を閉ざしていた。

そんな中、七城優一と出会い、交流しているうちに恋に落ちる。それを認めたくない貴族達にクーデターを利用し誘拐されかけるが、七城優一が助け出し、学園都市へと逃げて来た。

特殊能力『ウエスタの告示』

『ウエスタの巫女』が持つている特殊能力。神の右席以外の、どんな魔術でも、詠唱、霊装などを必要とせず、ノーモーションで即座に発動が出来る。

これにより、魔術的な攻撃はすべて無効化される。

ロイ・ミス

フィオナの近衛騎士。

代々、ハーベル家に使えて来たミス家の出身。

『ガーディアン守護者』と異名を取る練達の剣士。

また、騎士団長と互角の剣の腕を持つ。

フィオナが心を開いていた数少ない人間の一人。

クーデターで、貴族の大軍を相手にし、3人を国外へ逃亡させた。

その後の消息は不明。

エリシア・ミス

ロイ・ミスの妹。フィオナお付きの侍女。

栗色の髪をボブカットにした美少女。

侍女でありながら、類い稀な才能を有し、その魔力はキャーリサ王女と並び称されている。

そのほかに、剣術、体術にも秀でており、そこら辺のチンピラなら軽くひねり潰せる。

『駆け抜ける風』の異名の通り、火、土、水、風の四大属性のなかでも、特に風の魔術を得意としている。

## オリキャラ紹介。(後書き)

いかがだったでしょうか？

完全オリジナル設定も織り込んでいます。  
それでは。

恐怖の体育！？（前書き）

オリキャラが二人です。

## 恐怖の体育！？

こんにちは。上条当麻です。

今、体育の時間です。女子更衣室で着替えています&めちゃくちゃにされています。

「うわー！上条君胸あるよー！私よりもっ」

「この前まで男だったのに！けしからん」

えー、状況は察してくれるとありがたいです。

今日は男子と合同で体育だそうです。

どこからか、歓喜の叫び声が聞こえた気が。

「しかし、女になるとは、珍しい現象もあつたものですね」

「そうだね。かみじょー、お前いつまで女なの？」

「上条さんはそんなこと知りませんのことですよ」

場所は変わって、校庭。

「はいはい、皆仲良いじゃんよー、今日は能力使用ありの女子対男子のドッジボール！ただし、一方通行は能力使用無しじゃん」

「ちよつと待ちやがれエ！それは不利すぎるだろオ！」

「その分上条を守るじゃんよー」

「つまり、最弱を守るためならいいんだな？」

「じゃんよー」

え、え、私？

「え、えつと……よろしく？」

と言って一方通行にペコリ。  
アクセラレータ

(クソツタレエ、かわいいじゃねエか)

「しかたねエ。守つてやるよ！」

ちなみに私、上条当麻はなぜか男子チームにいます。普通私、女子じゃない？

「それじゃあ、スタート！」

ボールを投げる黄泉川。女子はもうスタンバっている。

「えーと……、雪降り！その上条君に当たれえ！」  
白雪月夜、凍結操作能力のレベル3。能力名は、『絶対零度』  
雪を作ったり、物を凍らせる能力。

色白の肌に、黒髪の美少女。

「いきなり私かよっ！よーしこんなときこそ右手の**n**……あ、使えなかった」

「馬鹿かア！三下ア！」

「ったく、仕方ねえなっ！」

優一はそう言いつつ背中の大剣、たしか、『**REBELLION**』  
だったか？に手を伸ばし、引き抜くと、

『**DRIVE**』

左から右に斬り上げると同時に強力な衝撃波を放った。

「は？」

「この節操無しのフラグまみれがっ！」

「ちよつと本気になったわたしの純情返せっ！」

「浮気者！信じてたのにつ！」

「でもそんな上条君がイイ！」

「私の想い、受け取ってええええ！！！」

「おいおい、マジかよっ」

バゴオオオンッ！！！！

その能力の集中砲火は――私を庇っていた優一に直撃。

「優一！大丈夫！」

優一は――傷一つなかった。

「……うっそお」

「ハッ！その程度か！軽いな」

あー、うん。そういえば優一って後方のアックアと互角に斬り合っ

たんだつたつけ。

「じゃ、今度はこっちの番だ」

『黒剣 戦神』

大上段に振り上げた刀を地面に叩き付け、地を這うように衝撃波を飛ばす。

「任せてっ！」

エリシアが前に出て来る。

『ゲイルウエポン』

風を纏った長剣でその衝撃波を止めた。

「随分と力セーブしてるね。それじゃ私に勝てないよ？」

「What's you say?... Huh!」(和訳：何か言っ  
たか？ハッ！)

あーあ、挑発に乗っちゃったよ優一のヤツ。

「ゆーいちは私が足止めしてるからその間にっ！」

ガギン！ガガギン！ガギン！

剣戟の音が校庭に響き渡る。

「エリシア、僕を足止め出来るとでも思ってたのかよ！確かに腕は上げたみたいだけど！」

あーら、2人で決闘始めちゃったよ。

「今のうちだア、さっさと片付けちまおうぜエエエ！...！」

一方通行が吠える。

とは言っても、杖を持っている身体では避けるのも一苦労だ。

一方通行がボールに当たりそうになった次の瞬間！

「危ないにゃー！！！」

「ふげぶっ！」

土御門に蹴っ飛ばされた。

「テメエ！何しやがる！」

「助けてやったんだから感謝して欲しいにゃー」

「にゃーにゃー言っな気色悪イ！」

数分後。

私たち4人（私、土御門、一方通行、青ピ）は仲良く外野へ。

「仲良く4人外野なわけですが、そろそろ反撃といきませう」

「何言ってるんやカミヤん、ボクは女性の味方でっせー」

「あら？私も『女』よ」

「……」

「まあまあ、ちよいと待つにゃー。ーおーい。ここらで罰ゲーム  
決めとこうぜい！勝ったチームが負けたチームを好きにできる！も  
ちろんカミヤんも自由だにゃー」

「……乗った ……！！！！」

即座に返事する女子一同。皆一様に目がギラギラしている。

「ちよつと待った、上条さんの人権はどうなるんでせう!？」

「あー、まあ、どんまいだにゃー」

「土御門オオオオ!!!!」

「……うおおおおおっ!!!!」

女子を思つがままに出来るとあつて男子も負けず劣らずテンション  
が上がっている。

「なんか私だけ背水の陣みたいなんですがっ？」

「付き合いきれねえ」

「いやいや、付き合ってもらうでー。一方通行はんでええかな？呼  
び辛いから

「一方さん〇〇ー通さんでどうや？」

「どつちも却下だクソツタレ」

「じゃあ、一行（I K K O）さんだにゃー」

「死なすぞテムエー!」

「……、上条君人気だね。まあ、私も結構好きだし。一方通行もかっこいいけど」

そう言いながら、外野に向かって吹雪を起こした白雪。雪のせいで視界が悪いし、いい加減手が冷たい。でも、白雪自身は平気。なぜなら、自身の能力を使うため、いつでもどこでも、耳当てと手袋を携帯しているのである。（私はアックアか）

「ホラ、さっさとあの幻想をぶち殺せよ<sup>なだれ</sup>」

「滅相もございませんよ最強！『こつから先は一方通行だー！！』  
て言っただけよ。』」

（まあ確かに、この吹雪を消せばポイント上がるかもなあ）  
なんて思っている一方通行と下心が分からない上条当麻。

互いに互いを盾にしようと組み合いながら吹雪の中に消えて行った我らがHEROES。

その吹雪のなかで、おもむろに一方通行が電極のスイッチを弾く。  
そして私を後ろに庇いつつ吹雪を、剣戟の音が響く場所へとぶっ飛ばした。

「邪魔だつ！」

「邪魔つ！」

優一は砂を粒子震動させ、『砂嵐<sup>サイフルス</sup>』を形成。

エリシアは魔術を高速詠唱、『竜巻<sup>ストーム</sup>』を形成。

2人揃って飛んで来た吹雪に打ち上げた。

「息ぴったりすぎるにゃー」

「喧嘩するほど仲がいいってことかいな」

「で、お前らは人様の後ろに隠れて何やってるんですかア」

「カミヤんと一方通行も息ぴったりやん」

私は一方通行の腰にしがみついたまま。

（くっそー、ポイントとられたにゃー）

「さアて、白雪とか言う雪女は場外確定だなア」

白雪は危険を察知したのか、雪の壁をつくり出している。

「危ない、月夜ちゃん！ボイスシャット声帯衝撃機動！

目標、上条当麻と一方通行！

総員対シヨック・対鼓膜破碎防御！発射10秒前！9、8、7……」

白雪を救うため、親友の茜川が能力を使おうとする。

ちなみに、何でこんな台詞を言っているのかというと、能力の機動に時間がかかるためである。

けっして宇宙戦艦ヤマ（自主規制）のせいではない。

って私は誰に向かって喋っているんだ？

一方通行は傍観者となっていた男子Dを掴んで放り投げる。

その先には雪の壁。考えるのがめんどくさかった一方通行はどうなるかも知らずに投げ込んだ。

「不幸だー！！」

男子Dドンマイ。

だが、私、上条当麻が不幸体質ならば白雪は逆。

「3、2、1、発射！」

茜川が声に乗せて放った衝撃波は男子Dを直撃。男子チームの方へくるくる回って戻って来た。

その戻って来た男子Dを『リベリオン』で場外ホームランにする優一。

あれ、いつの間に戻って来たんだ？

「エリシアちゃんはどしたんやー？」

「あ、服を少々セクシーにしてやった」

優一が指差した方には、何ともセクシーな腹だしシャツとホットパンツ（体操着を斬って作った）をきたエリシアがいた。

なぜか、立とうとしても立てない状態。

「なにしたんや？」



頑張った結果。

豪雨になった。

普段、雪しか降らせないので傘は持ってない白雪。雪が降らないだけマシだろうが。

「止められねエのか、白雪！」

優一はフィオナさんを抱き抱えたまま、叫んでる。濡らさないように。

「というか、雲の温度下げたのに雨っておかしいだろ！制御めちゃくちゃになってんぞ」

「クソッ、これ以上はバッテリーが持たねエ。……ン？なんか雨が温かくなってねエか？」

おそろしや、フラグとはここまで人を狂わせるものなり。（あんた誰だよ）

「女子の勝ちじゃん。七城、あの雲けせるじゃん？」

「お任せあれ」

ドゴオンッ！！

大気を殴りつけて震動を伝え、雲を爆散させる優一。つくづく規格外だよなあ。

ただ、それだけでは終わらないのが私上条当麻。

優一の能力でぶっ壊されたコンクリ片が頭に直撃。

気絶した。

逆にそれだけで済んだ私の方がおかしいらしい。

保健室で目を覚ますと、たくさんの女子が顔を覗いていた。

「起きたかにゃー。カミヤん」

「ハッ、なんだよ。生きてんじゃねエか」

「そんな事を言いつつ見舞いにくるツンデレのアクセラレータ。略してツンデレータ」

「死ね！」

土御門と一方通行の馬鹿な会話はほつといて。

「あ、上条君さっきはごめんね？お詫びに雪だるま  
自分の能力で、雪だるまをつくってきたらしい。」

念のため左手で受け取りながら、どうしようか考える私。

帰りのHRでは、明日から行く修学旅行の話をしていた。

帰りに御坂に会って、修学旅行はどこに行く？と聞いたら、「近場  
の温泉」だそうだ。

まさか……ねえ

だが、この私の予感当たるのであった。

**恐怖の体育！？（後書き）**

いかがだったでしょうか？

次回は修学旅行初日をお送りします。

それでは

行事ってかぶるものでしたっけ？(前書き)

少しシリアス？かもしれない。

行事ってかぶるものでしたっけ？

時は飛んで、バス車内。

私たちは修学旅行へと向かっていた。（修学旅行と言っても、近場の温泉なんだけどね）

「この席順には何かの陰謀を感じるんやけど」と青ピがぼやく。

彼の隣は土御門、男子A、B。

見事に女子が居ない。

あ、私の隣は一方通行。<sup>アクセラレータ</sup>

「先生の決めた席に文句あるですか……」  
今にも泣きそうな担任教師。

「にやー！そんなことぜんぜんですたいっ！ていうか一方通行！黄泉川先生含め三人の女性と住んでるって本当かにやー！」

「アア？うるセエンだよ。スクラップにされたいのかア？オレは寝んだっつの」

ついでにベクトル操作のおまけ付き小石を、土御門に向かって投げた。

「このバカーっ！」

いまにも寝ようとした一方通行に私の右手が炸裂する。

今は反射してなかった。良かった。

「デメエ、なにしやがー」

「あなた、今寝るって言った？その台詞を私たちのために一生懸命バスレクを準備してくれた小萌先生の前で言えるのかしら!？」

「アア!？なに言ってやがンー」

一方通行が視線を向けた先にはうるうるると涙目の小萌先生が。

古今東西、一流の悪党は泣いている女性には勝てないのだ。

「チツ……、さっさと始めやがれ」

「よーし、みんな！ビンゴ大会の時間だよっ！」

「おー！おー！おー！おー！！！！」  
ビンゴ大会で一個も穴を開けられずゲーム終了と言う、奇跡的な敗退をするのは別の話。

「にゃー、べ、ベクトル操作はズるいにゃー」

土御門が言うには、自分の能力を最大限活用したらしい。

私は、私をからかったり、馬鹿にする一方通行を睨む。

(イイねエその視線！オレの女にしくなっちまうぜ！)

横に居る白雪や茜川が、くすくす笑うくらいに楽しいやり取りだろ  
う。

「あんどけ言つといてそのザマかよ、ざまアねエなア」

「これくらいの不幸は想定内ですコンチクショー」

「女の子が汚い言葉使ったらだめよ。上条当麻」

エリシアに注意されちゃった。

とか言いつつ、旅館の中に入る一行。

「あ」

そして立ち止まる私。受付で自分達の高校以外に『常盤台中学一行様』と書いてあるのを見つけたからだ。

「…………、はは、やっぱりな。心の準備をしてきて良かった」

『必要悪の協会一行様』

「ぶー！ぶー！ぶー！ぶー！ぶー！ぶー！！！！」

いくらの心の準備をして来た私でも、そこに書かれていたもう一つの団体名を見れば盛大に吹き出さざるを負えなかった。

もろ想定外の範囲よっ！！

「どうした？」

と優一が名簿に駆け寄る。そこに書かれていた名前を見たとき、  
険しい顔になった。

「あん？まだ追って来る気か。クソツタレが」

そっぴいえば、フィオナさんと逃げる時、何人かの『必要悪の協会』



「…………、チツ、甘ったれ野郎が」

「フン…………」

うわーうわーうわー。ステイルも優一もキレてるよ。  
大丈夫かなあ。

行軍ってかぶるものでしたっけ？（後書き）

次回はさらにキャラが登場します。  
それでは

遭遇。(前書き)

えー、ごめんなさい。  
はっちゃんけました。

## 遭遇。

「あれー？ステイルちゃんじゃないですかー？」

「っ！？（しまった！？日にちを合わせて来たはいいが、こいつの担任はこの人だったか……）」

「ていうかさあ、あの銀髪のシスターかわいくない？」

と横に居た男子Aに話しかける男子Bこと形原。

「うん、上条の名前を呼んでたって事は上条の知り合い？って土御門？何でそんな凄い顔をして固まっているのさ？」

土御門と話す男子Aこと井伊。

「べ、別になんでもないにゃー（何で必要悪！？なんでこっちに招待状が届かなかったんだ！？）」

「先生！私たちちよつとトイレエエエー！！」

「ちよつ、上条ちゃん！？上条ちゃんは女の子なのですよー！」

小萌先生の話のスルーしつつステイルと土御門を引きずってその場を離れる私。

「ぜえ、ぜえ、何でここに居るのか100文字以内でどうぞ！？」

「何でって、ただの慰安旅行だけど？」

「嘘よ！絶対、新手的魔術師が出たとかそんな話でしょっ！」

「ほほう、察しがいいね」

「やめて、私の楽しい旅行を壊さないで！」

と身長差から自然に見上げる様な形になる私。

（うっ、かわいい！いや、僕にはインデックスがインデックスがインデックスが以下ry）

「思わせぶりなこといつてるけどにゃー。なんにもないんだぜい」

「じゃあ、ステイル達今は完全にオフ？」

「そっいうことにゃー。ズバリ、インデックスと一緒に行きたくっただけど誘う勇気が出なかつたからネサセリウス全体の旅行を企画し

たのかにゃー？」

これだけの長台詞をノンブレスで、しかも嘸まずに言えた土御門は凄いなと思う。

「違うっ！企画したのは神裂達だ、インデックスと一緒に行きかけたのは彼達だよ」

「ちよつと待った。今彼つて言つたかしら？」

「そうだよ。君にかけられた魔術の範囲は全世界に及んだ。神裂、オルソラ、……君に好意を寄せていた女性達は男になったよ。しかもイケメンの」

「不幸だー！！」

「ちよつ！カミヤん、何で僕だけ置いてくの！？」

「ンだア？青髪ピラスから赤髪ピラスに乗り換えかア？」

「ガビン！？こうなつたらアクヤん！新たなコンビ決定や！」

「うるせエ。勝手にあだ名付けンじゃねエ」

「ならいいんだけど」

それだけ確認できればいい、と皆の元に戻り、旅館に入る所で、

「え！？何で上条さんがここに！？」

「やつほー、兄貴ー」

「にゃ！？」

そこに居たのは、『男』の御坂美琴と、研修や何やらでついて来た『女』の土御門舞夏とご対面。

青髪ピラスをベクトル操作を使って地面に沈め、私たちの元へとやって来た一方通行。

しかし、そこに居たのはかつての敵でオリジナルの御坂美琴だった。「ンだとっ！？オリジナルまで男になつてンのか！？」

あー、うん。そりゃあ、驚くか。

それ以外に言うことが見つからず、私の肩を掴んで御坂の方へ押し

やる一方通行。

私は鞆につまづきながらも、綺麗に御坂の胸へとダイブ。

「上条さんって以外と大胆なんですな。俺、うれしいです」

(ミスツた。オリジナルは最弱のことが好きなんだよなア)

至近距離で微笑まれ、赤面した私は後退し、後ろにあつた鞆に足を引っかけ、盛大に転んだ。

「いったあ……」

「痛い！ってミサカはミサカは一方通行の鞆の中で人知れず叫んでみたり！」

「……アア？今、ミサカ？ラストオーダー打ち止め？なんでお前ついてきてンだア

！黄泉川ツ！なんでこいつがここにいるンだよツ！！」

隣の自分達のクラスに向かつて叫ぶアクセラレータ一方通行。

なるほど、彼ならベクトル操作して重い物を重くないようにすることが出来る。

もしかしたら、荷物を詰めたのは他人任せだったかもしれない。しかし。

クラス一同「(いくら何でも気づくだろう……普通)」

「あー、持って来ちゃったのはしょうがないじゃんよー。一方通行が責任もって世話してやるじゃんよー」

とてつもなく棒読みな黄泉川先生。知つてて持って来たに違いない！！

「付いて来てしまったものはしょうがないんだよーってミサカはミサカは一方通行に抱きついてみたり！」

「開き直ってンじゃねエぞこのクソガキっ！っつか、さっさと離れやがれ！」

打ち止めの頭を押え込みながら叫ぶ一方通行。

「あああ頭ー！痛いっ！助けてってミサカはミサカは…はっ！！」

呆然としている私と御坂の後ろに隠れる打ち止め。

「パー、一方通行がいじめるって、ミサカはミサカは告げ口して



ちなみにインデックスの首根っこも掴んでいた。  
ありがたい。

「何で白井がいるの！？学年違うでしょ！？」

「お兄様……いえ、生徒を守るためです」

……、男になっても、百合的尊敬は変わらないのね。

「普通に考えて、当麻が4歳の時に出来る訳がねえぞ？何考えてんだあんたら？チビガキは超電磁砲レールガンの妹だろーが」

と優一に絶対零度の視線を向けられた。

**遭遇。(後書き)**

いかがだったでしょうか？  
次回は波乱の部屋決めです。  
それでは。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4645x/>

---

とある当麻の性転換

2011年11月19日06時41分発行